

微小粒子状物質（PM2.5）の発生源寄与率の推定結果（令和2年度）

令和2年度の成分分析調査結果から、発生源の寄与率を推定する手法のひとつであるCMB法による解析を実施しました。

その結果、夏季は硫酸アンモニウム、冬季は硝酸アンモニウムの寄与割合が大きく、年平均は硫酸アンモニウムの寄与割合が最も大きい結果となりました。

硫酸アンモニウムは、硫黄酸化物とアンモニアの光化学反応により生成されるものであり、光化学反応は気温が高い時に活発になるため、夏季に濃度が高くなったと考えられます。

一方、硝酸アンモニウムは低温時には主に粒子状ですが、温度が上がるとガス状となるため、冬季に濃度が高くなったと考えられます。

また、一般環境大気測定局である市役所測定局と自動車排出ガス測定局である古淵測定局の解析結果を比較すると、国道沿いに設置されている古淵測定局の方が自動車排出ガスの寄与割合が大きい結果となりました。

微小粒子状物質（PM2.5）発生源の寄与率の推定結果（令和2年度）

